

都市の生活と幼児の保育

— 一九六九年を迎えて —

友 松 諦 道



一、幼児は家庭生活に何を期待しているのか

つい先だったのことだ。教えている保育専攻科の学生たちに、幼児が現在父母に対して何を望み、何を期待しているかを調べてもらったことがある。学生たちはみな一応教諭の資格をもっており、昼間それぞれ東京都内の幼稚園でクラスを担当している現職者でもある。そんなわけで受持の幼児一人ひとりに直接、「いま、両親に何をしたいか」と尋ねてみることによって、家庭環境や親子関係についてまで、いろいろ考えてみる資料が得られるのではなからうかと思っただからである。

学生たちの報告書のなかにはもちろん共通するところもあったし、またその学生なりにまとめてきている受けとり方もあった。思慮深い学生たちにとっては概して調査の結果、思いがけない答えに接し、日頃の保育を反省することが少なくなかったようだ。

「一人ひとりの環境と希望とを較べてみて考えると、本当に生活がにじみ出ていると思った」「私たち教師はこのような実情をもっと早くつかんで、指導の参考にしてゆかねばならぬはずだった」「調査をしながら、子どもたちの社会的環境をこれまで私たちは余りにも通り一ぺんのことにしか考えていなかったことをすまなく思った」「父親の職業を改めて見直していったら主な職業は運転手、母親は内職やパートの仕事をやっていて、ほとんど親と接する時間を持たない家庭の子どもが意外と多い。こんな環境のなかで子どもたちは今まで何を考えていたのだろうか、自分の保育の甘さにふとやりきれぬ思いがかすめた」等々、かなり突っ込んだ見方をしてくれていた。

僅か五、六歳の幼児のことであるから、私が一応設定しておいた問に答えた内容は何れの園においても大同小異、至って素朴であり、いわゆる幼児らしい答えであったにすぎない。おそらく地

方の幼児を対象とした場合でも、それらはさして変わらぬものであろう。「何々を買ってほしい」「どこそこへ連れて行ってほしい」というような項目が子どもからの期待の一番高いものとしてあげられている。「一しょに遊んでほしい」などという期待も当然のことながら高い数を占めている。

しかし、学生たちがそれらの答えを通じて前述のようなまとめを付しているのは、やはり子どもからの答えからにじみ出ている生活の臭いともいえるものを感じとっていたのであろうか。「子どもたちの発言をこのままにしないで、今後の保育のなかでも考えていきたいし、両親とも話合ってみなければならぬ」と思っている」入園の際記入してもらった父兄の書き込みを改めて読み返してみると、これが家庭での教育方針であるといったものが見当らない。悪くいえばこれらの家庭には筋の通った教育方針などはなかったのではなかったか。幼稚園にやっておけば何とかなるという消極的な態度が、結局、根底にあるのではないかと書いてある学生もいる。

子どもたちの答えのなかには、地域差からくる家庭環境の違いが影響しているのは当然のことである。山の手の恵まれた家庭の子どもたちより、下町の、それも勤労者の住む地域の子どもたちの答えの方がはるかに生活的な要素は大きい。「もっと働いてお金をもうけてほしい」「お金をためて家を建ててほしい」「日曜日も寝ていないで働いてほしい」これらの地域では父親に対する希

望ばかりでなく、母親に対しても同じような期待が散見する。

「留守の間は、ちゃんと留守番しているから働いてほしい」保育所の場合なら、ごく自然な子どもの発言であるかも知れない。学生たちは幼稚園での仕事だっただけに、明らかに虚をつかれた驚きが大きかったのであろう。

都市の生活というと、我々はとかく明るい方を向いて考えがちである。いずれは近いうちに、欧米の高い生活水準にまで追いつきそうな錯覚をお互い多分に感じとっていたのではないか。しかし、子どもの声は現実の声である。「お父さんが仕事をしてたくさんお金をとってきて、僕を幼稚園に入れてくれたからありがたいと思っている」こんな言葉も記録されているが、おそらくは日頃母親からそのようないきかされていたのであろう。だが幼児の発想であろうとなかろうと、幼児の生活はつねに夫婦間で生活の真実が語られているなかで育てられてきていることには間違いない。

二、社会の領域のなかで考えてみる

教育要領の社会領域の第三の柱に「身近な社会の事象に興味や関心をもつ」とあるが、続いているの項目に、(1)幼稚園や家庭ではみんなが助けあっていることを知り、親しきをもつ。(2)幼稚園、家庭、近隣などには自分たちのために働いている人がいることを知り、親しきをもつ。(3)いろいろな人が、いろいろな場所で働いて、

人々のために物をつくっていることに気づく——。これらは幼稚園の保育のなかで取上げられ指導されることになっているわけだが、私は前述の調査を終わったあと学生たちに次のような話をしたことだった。

「家庭には人間が生存していくための共同の生活がある。幼児にも、みな助け合っていかなければならないことが理屈なしにわかってくる。わかるというよりも既にそれが実践されているところに生活共同体としての強みがある。その点幼稚園の生活には生存の基盤がない。つくられた和合の集団だから、そこでの教育はどうしても知識を加えるという作業になってしまう。だから、これらの項目については家庭の協力、わけでも父親の助力がどれほど大切かということを父兄に話をしてほしい。両親が日々体験している仕事の話から、これらの項目になされている社会のひろがりについて話していく。このことの方が、園でどこそこへ見学に行くことより教育的な効果が大きい場合があるわけだ」

本誌から与えられた課題「都市の生活と幼児の保育」について、私のいいたいこともここにある。別に保育が不必要であるというのではなく、園での教育と家庭での教育との間には相互におかしたい独自のものがあるはずである。それらの違いをどのようにかみ合わせていくかが保育者としてのわきまえであって、家庭との連絡を密にするなどとはいっても、どこに教育の視点を置くかによって期待する内容が違ってくる。それは領域社会の面だけ

ではないかも知れない。自然の領域では、父母との生活を通じて注意深く見る眼も育てられていくに違いない。健康の領域では清潔の習慣は家庭生活を通じて身につけていくものである。

ただ私がここで特に指摘しておきたかったのは、働くことに対する理解とか勤労といった言葉で表現される生活能力の基礎となる一種の積極的な行動の傾向といったものは、幼児期において特に家庭の側の助力によって育てられていく必要があることを考えてもらいたかったのである。

これも調査したことがあるが、家が商業の場合をのぞいて子どもたちには父親の職業がなかなかつかめない。会社つとめの父親なら夕食の折にでも会社での出来ごとを幼児向けに話してくればよいのだが、そんな働きかけをしている園がどれだけあるだろうか。都市の生活は家庭の職業も千差万別であり、幼児に対して決してたやすい指導内容でもないので、ついこの辺がボカされがちになっているが、家庭との連携の面で考えていきたい問題がここにあるように思う。

三、生活の近代化と保育することの役割

私は既刊「海外幼児教育資料」のなかで、ソ連のPTA向雑誌セミヤ・イ・シュコーラ一九六二年第三号の巻頭にのっていた、A・レフシンの「家庭についての考え」を紹介したことがある。

それを取上げた理由の一つは、ソ連の社会は党の綱領によれば間

もない時期に共産主義社会に移行することが約束されているという。その場合に、従来考えられているような家庭は崩壊し死滅してしまふものであるか、それとも存続する意味のあるものであるかが論じられていたからである。

取上げた理由の第二は、これがその論旨の結論ともなっているのだが、たとえ共産主義社会となっても家庭は従来の通り存続する。夫が給与を持って帰る家庭ではなくなるが、夫は給与の代りに仕事の喜びや悩みを、即ち社会生活と連帯した問題をかかえて帰ってくるようになるという。そのような家庭では余暇がふえ家政の役割も削減されていくわけだが、そのなかで若い両親にとつて一層大切な役目を帯びてくるのが子どもに注ぐ愛情のあり方であり、子どもの教育における家庭の役割を認識することであることが述べられていたからである。興味のある方には本書の方に目を通していただくことにして、私がここで簡単にまとめておきたいのは、そこでは集団での教育には限界があるということをいい切っている。幼児を集団の中に長くおきすぎると大衆のなかに個性を埋没してしまうから、集団での教育と家庭での考え深い教育とが合理的に結ばれることが期待されていることに興味をもったからである。

私共の社会と社会主義国では考え方の異なる面もたくさんあるわけだが、今日のわが国のように資本の高度化、集中化がはげしくなっていく国のめざすところは、何れは社会福祉国家としての完

成ということであろう。共産主義とは違った極の上で考えても、前述のレフシンの言葉ではないが、違った意味での個性の埋没する時代となりつつあることは事実である。

マスコミの発達、あらゆる面でのマスプロ化が国民生活を否応なしに画一化する方向へと運んでいるわけだが、都市に生活する場合、地方におけるよりはるかにその影響が大きいことはいうまでもない。

一九六九年の新年を迎えるに当たって「都市の生活と幼児の保育」という執筆題をいただいたが、保育の現場で仕事をしているものとして特に考えねばならないと感じたことは、上述のようなことから、保育と家庭との結びつきを改めて考えてみたいということ、この点が第一であった。

そして第二は、これについては紙数もないので書き記すことだけにとどめるが、人口の都市集中にともなう施設の拡充と適正配置の必要とか、同じ都会でも地域差によって保育時間や保育方法について幼稚園の場合ももっと多様化していくことも考えられるのではないかということ、そのほか保育費の父兄負担の軽減とか保育者の生活安定の方策など、考えねばならないことは決して少なくないことを付け加えておきたいと思う。

(神田寺幼稚園)